

「よう、小悪魔ちゃんよ、今ちよつといいか？」

「ええ、どうしました？」

書架の整理中に声をかけられ、振り向いた。こちらを見上げていたのはホフゴブリンだ。醜い。顔はワンツーパーンチを食らったようにひしゃげ、団子鼻には大きなイボが浮かんでいる。胴長短足の矮躯に対して腹回りはでっぷりとしており、妖怪絵巻に出てくる餓鬼を思わせる。こちらを見つめる視線はいやらしく、あふれる色欲を隠そうともしていない。嫌悪感を催すには十分だが、小悪魔は嫌な顔一つしなかった。むしろ、にこやかに対応してみた。当然だ。彼らは利害の一致する大事なパートナーなのだから。

「どうしました、なあ？ 分かっているくせによ。図書館は涼しいが、外はクソ暑いんだよ。まさに八月つて感じだよ。……で、こう暑いと仕事なんかやってらんねえからよ、へへッ、ちよつと『相手』してくれや」

「あら。それは困ります。仕事中ですし。私、あなたたちと違って真面目なんですから」

「はん、言ってくれるじゃねえの」

言葉だけ見れば、わりとはつきり拒んでいるように思える。しかし実際の彼女の口調は、むしろ誘いを喜んでいるようなものだった。口元には明らかに笑みが浮かんでいる。頬はほんのりと紅潮し、その気であることを示していた。

「まあ、仕方ないですね。いいですよ。パチュリー様も今は読書に夢中で、しばらく私が呼ばれることもないでしょうから。ついてきてください」

結局、何だかんだ言いながらも彼を先導する。途中、尻を撫でられた。振り返る。彼は当然といわんばかりの態度で、少しも悪びれていなかった。小悪魔も小悪魔で、やん、と口にはしたが、拒む様子はまるで見せない。これもまた、当然だ。彼らは上客だ。多少のおい々は許容される。

地下図書館は書架が複雑に入り組み、大迷路と揶揄すらされるほどだ。通路から死角になる疑似プライベートゾーンを、彼女はいくつも知っていた。彼を導いたのは、そうした隠れ家の一つだった。

「ここならいいでしょう。ちょっとくらい騒いでも、なんの問題もありません」

「へッ、ちよつとで済むのかねえ？」

「さあ？ それは貴方しだいですよ」

「ほお、言うじゃねえか。……にしても、小悪魔ちゃんみたいな上玉に相手してもらえらんだから最高だなア、紅魔館」

書架に追い詰めるようににじり寄りつつ、ホフゴブリンは相変わらず、いやらしい目でこちらを見つめてくる。彼女は逃れようというそぶりすら見せなかった。全て、合意の上

でのことなのだ。

小悪魔は複数種の血をひく雑種だが、特に強いのは淫魔の血だ。淫魔であるため、力を保ち磨くためには男の精が欠かせない。ところが、つい最近まで紅魔館は女所帯だった。おかげで、強力な魔女の下で働きながらにして、悪魔としての格は凋落しっぱなしだった。そんなところに現れたのがホフゴブリンだ。性欲の権化のような種族で、女を性欲処理の道具程度にしか思っていないようなクズどもだ。

脳味噌まで精子が詰まっているような性欲の塊は、よそでは忌避されるだろう。しかし小悪魔からすれば、まさにうってつけの人材だった。卑猥な視線を向けてくる彼らを誘うなど、まさに赤子の手をひねるようなものだった。物陰に誘い交わって、渴きをたっぷり癒やさせてもらった。久方ぶりのスペルマは、実に甘美で、肉欲を満たしてくれた。

それ以来、ホフゴブリンとの肉体関係は続いている。彼らは気持ちよく射精ぶっばなし、こちらはそれを啜る、まさにウインウインというやつだった。

「んじゃあ、早速頼むわ。最近溜まってっからよお」

言って、ホフゴブリンは仁王立ちのまま顎をしゃくる。お前が脱がせろ、というのだ。横柄な態度だが、いつものことだった。特に文句も言わない。上客の態度を咎めるほど、狭量でもなかった。

床の絨毯に膝をつき、跪く。ホフゴブリンは基本的に、腰布一丁で過ごす。衛生観念に乏しく、滅多に洗濯しない。彼も例外ではなかった。八月の熱気で汗をたっぷり吸った、猛烈な臭気を放つソレに手をかける。そして、一息に解く。

「あはッ……」

途端、ぶるん！ と、猛る闘牛のように、彼のペニスが姿を現した。小悪魔が漏らしたのは、嫌悪のうめきではなく、恍惚の溜息だ。

ホフゴブリンは小柄な種族だ。にもかかわらず、竿は小悪魔が他に見たこともないほど立派だった。硬く、太く、雄々しく、長さに至っては彼女の顔面ほどもある。亀頭は槍の穂先のようにだし、幹に這い回る血管は大蛇のようだ。なにより、匂い。あたりにむんむんとまき散らされる雄臭は極めて濃厚で、小悪魔のような女を発情させてあまりある。実際、彼女は既にソレから目が離せなくなっており、頬を赤らめ、瞳をとろんと蕩けさせていた。図書館内は空調がきいているが、それでも体がかあつと熱くなる

顔も性格もマイナス百点、ただしペニスはプラス一億点。ホフゴブリンはそんな存在で、つまり小悪魔にとってはたいへん素晴らしいビジネスパートナーだった。

「ああ……本当、いつ見ても凄おい……」

「へッ、何が困りますウだ。あつという間に夢中じゃねえか。ほれ、いつまでもトリップ

してねえで、さっさと満足させてくれよ？」

彼が腰をわずかに押し出す。柔らかな頬が硬い亀頭に押され、むにゆりと形を変える。もちろん彼女とて、いつまでも惚けているつもりはなかった。口を開く。夏の熱気ゆえか、はたまた興奮によつてか、唾液は普段よりねっとりとしていた。

「んッ、ふ、ちゅう」

リキッドルージュの艶めく唇が、汚らしい陰茎の先端に触れる。挨拶代わりのキッスだ。柔らかな唇が男根に押し当てられ、柔軟に形を変える。むちゅ、と、きわめて卑猥な音が小さく鳴る。

「れ、ろおお」

「おッ、いいぞお……ッ」

ザク口のような色の舌を突き出し、れろりと舐める。亀頭からカリ首、肉幹にかけて、ゆっくりと舐め下ろしていく。それだけで、ホフゴブリンは腰を震わせる。舌はゆっくり、竿の根元、陰毛あたりにまで向かつていく。

「んはああッ……」

呼吸をするたびに、汗の混じった雄臭が鼻腔を満たす。普段ならば悪臭でしかないが、今はくらくらするフェロモンのように感じられた。

「は、あ、ツ、むツ、んふううツ」

たつぷり数分間にわたる挨拶を終え、いよいよ彼女はソレを啞え込む。一口で、奥まで深々と。女の本性が昂ぶり、そうせずにはいられなかつたのだ。

途端、口の中で爆発が起きる。漂っていた汗と雄の臭いが、唾液と混ざり合うことで、ふわりと膨れ上がったのだ。

「んツ、ふうううツ……」

肉竿に塞がれた喉の奥から、小さなうめき声上がる。不快に感じたからではない。逆だ。口いっぱいに広がった男のアロマに、たまらない恍惚を覚えることだった。

「んふううツ、ぢゆるツ、ぢゆるる、ずぞツ、がぼツ、くぼツ、ずろろツ」

しゃぶりつく。もう夢中だ。人參をぶら下げられた馬のごとくだ。

ぢゆるぢゆると音を立て、唾液をまぶしながら、頬を窄めて頭を前後させていく。根元に指を絡ませ、しこしこしこと優しく扱く。赤黒い亀頭に舌を絡ませて、れろりれろりと舐め回していく。特にカリ首のあたりなどは、匂いも味も濃くて最高だった。

「ふむう、ツ、ぢゆる、んふううツ、んふううツ……」

「おうおう、ドエロい顔しやがって。そのツラだけで百発くらい出せそうだわ」

鼻先が陰毛に埋もれて、肺いっぱい雄臭が流れ込んでくる。普通なら、顔をしかめる

ところなのだろう。しかし、行為に臨んでいるのが小悪魔のような天性の好き者であれば話は別だ。灯りにたかる蛾のように、ソレに惹かれずにはいられなかった。

ぺちゃぺちゃと汁っぽい音をたてて、艶やかな唇を陰茎奉仕に使う。離乳食を食べ始めた子のように、唇や頬の周りにべったりと唾液が付着しているが、気にもとめなかった。垂れる前髪をかき分ける。うつすらかいた汗で額にはりつき、色気を醸し出している。

「んッ、ぢゆるうッ、れるッ、ぺちゃ、んふうッ、くふッ、んう……」

空調の行き届いた図書館に居ながらにして、彼女の頬は紅潮していた。ふう、ふうと、漏れる鼻息は荒い。フェラチオにより興奮しているのは、誰の目にも明らかだ。

興奮は、腹の奥をきゆうきゆうと疼かせる。知らず知らずの内に両脚を閉じて、太腿を擦り合わせる。もちろん、ペニスによつて火のついた女の欲望が、その程度の曖昧な刺激で満足するできるはずもない。とうとう、脚を開く。

彼女が穿いているのは、小さなスリットの入ったタイトスカートだ。当然、そんな大股をおつ広げた姿勢をとれば、股間の花園が丸見えになってしまう。

「おッ、いいねえ」

ホフゴブリンからいやらしい視線を注がれているが、気にも留めない。彼を興奮させることは、精を啜るといふ目的とも合致している。それに、好色な目を向けられることは、

こちらのさらなる興奮にも繋がる。まさに良いことづくめだ。

「んッ、くウ、ふッ、んう、くう」

片手を、スカートの内へ潜り込ませる。シヨーツの上、パンスト越しに、淫豆を優しく揉むように弄くる。喉の奥から小さく声があがるが、もちろんこの程度では足りるはずもない。小さなかった指の動きは、すぐに露骨なものになる。布が湿り気を帯びて、くちつ、くちつと湿った音をたて始める。

「おっほ、サービスイいじゃねえか、イヒヒッ」

音はホフゴブリンにも聞こえているようだ。彼は目を血走らせ、眼前のオナニーシヨーツを見つめている。

一方の小悪魔は、身を焦がす昂ぶりにすぐに我慢ができなくなり、白い指をシヨーツの内に潜らせる。秘裂はすでに潤いを帯び始めている。疼く膣肉をなだめるべく、指を膣口にぐいと押し当て、体内へと潜り込ませる。

「んふう！ くウッ、ふッ、ンッ、あフウッ」

ちゆうちゆうと吸い付いてくる卑猥な襲を擦り上げ、特有の蕩けるような快感に溺れる。膣奥からは蜜が触れ出し、踊る指によってこねまわされて、くちやくちやくと音をたてる。気持ちよいのは気持ちよい。だが、疼く媚肉ツツギをこの程度でなだめられるはずもないのも



また事実だ。むしろ逆効果ですらあり、腹の奥の疼きはいつそう強くなるばかりだ。

興奮を癒やすべく自洗し、さらに興奮する、性欲のスパイラル。解消する手段は一つ、男の股ぐらにあるモノだけだ。

「おう、おう、そうだよ、そうやって必死こいてチンポ吸つてろ、おおお……ッ」

腰を突き出すようにして行われる自慰は、なかなかに激しいものだった。しかし、本来すべきことを忘れる小悪魔ではない。ぺちゃ、ぺちゃと品のない唾液音をたて、くぼッ、かぼッと空気の抜ける音を唇の端からあげながら、逞しい竿に尽くしている。一匹の女の本能が、そうさせていた。

「ンウツ——」

そうしているうちに、口内に苦み走った汁があふれる。先走りだ。いかにもうつとりとした、たまらないといわんばかりの表情を浮かべ、彼女はじっくりとそれを味わう。鈴口を舌尖を押し当てて、優しくほじくるようにまでしてみせた。

「おッ、やつべ、おおッ、うおッ、上つて来た、おおおッ……！」

「んぐうッ——！」

突然、頭を掴まれる。そのままぐいと引き寄せられた。当然、肉棒が喉奥を小突いた。口腔深くに潜り込んだ異物に横隔膜がせりあがるが、それはあくまで生理的反応だ。肉竿

に蹂躪され、脳内は幸福物質に溢れる。

「オラくれてやるよ淫売が、ありがたく飲み干せや！」

「んふッ、んぐウッ、んく——ンッ、んくううッ……」

同時に、雄の象徴は精を解き放つ。小悪魔は理知的でありながらも可愛げのある、相当に整った顔の持ち主だ。そんな美女の口腔めがけ、小便器かなにかのように気軽に、ホフゴブリンは子種を注ぎ込んでいく。

びゅぐるつ、びゅぐるつと、己の口内で音が聞こえる。音に合わせて、苦み走った濃厚な濁液が口を満たしていく。嫌がるどころか、注がれるそばから、喉を鳴らして嚥下していく。まるでそれが、天上の美酒であるかのように。

実際彼女にとっては、ネクタルも同然だった。彼女のするような淫魔の血をひくものは、精を注がれることで力を増す。存在が高まる恍惚は、スペルマを受け止めることで得られる。女本来の悦びと重なり、他では味わえないエクスタシーをもたらした。

「おおッ、おお、ッ、おお、すつげえ出た、おおおッ——」

「ん、ぐ、む……く、ふ、んぼッ」

たっぷり十数秒をかけ、肉棒の逞しい脈動が収まっていく。小悪魔は最後の最後まで、美貌が台無しのひよつとこ顔で、肉棒にちゅうちゅうと吸い付いていた。肉竿が抜かれる

瞬間に、ぢゅぽッ、と音を立てたほどだ。

「あ……はあ……。ごちそうさまでした……」

ルージュの色鮮やかな唇から亀頭にかけて、うすら白い粘液の橋が伝う。彼女はそれを舌だけで器用に舐め取ってみせた。

「へ、お粗末様でした、なんて言うにはちつと早エな。ホレ見てみるよ、小悪魔ちゃんがエロすぎるから全然収まんねえ。悪いけどもう一発相手してくれや」

大げさでもなんでもなく、彼のモノは、まるで萎える様子を見せていなかった。普通、射精後は多少なり小さくなるものだ。ところが彼は、かえって猛々しくなつてすらいた。

特異ではあるが、ある意味当たり前のことだった。他の種族ならいざしらず、彼はホフゴブリン、脳味噌まで精子でできているような種族なのだ。催したとなれば、口への一発ごときで鎮まるものではない。むしろ、これからが本番だ。

そう——本番が、これから行われるのだ。

「んもう……仕方ないですねえ」

もちろん小悪魔の側も、今ので終わりにするつもりなど全くなかった。なにせ自分は、先の自慰で達せていないのだ。性欲の炎は半端に煽られた形になり、下腹の底でごうごう燃え上がっている。淫蜜は卑猥な蜜をとろとろと溢れさせていた。することをしなければ

鎮まらないぞと、主張しているかのようだった。

「さあ、続きをどうぞ」

「うひよお、絶景じゃねえの」

書架に上体を預けるようにして、彼に尻を突き出す。美しいヒップラインがスカートの上にくつきり浮かぶ様は、まさに絶景だった。

「へへへ、最高じゃねえか」

ホフゴブリンはニタニタと笑いながら、魅惑の裾をゆっくり持ち上げていく。あらわになつたのは、それだけで欲情の対象となる、形良い尻だ。むっちりしながらも大きすぎず、肉をほどよく載せ、美しい球形を描いている。男を誘うためにあるかのようなヒップは、レースのパンティとパンストに包まれて、一段上のセックスアピールを醸し出していた。パンティはクロツチに明確に染みを浮かばせ、卑猥な匂いを漂わせている。雄を誘惑するフェロモンを漂わせ、交尾に誘っているかのようですらあった。一言でいえば、存在そのものが淫らだ。

「ああ、雌くせえ、たまんねえな」

顔を埋め、香りを嗅いでくる。続いて手をかけてくる。ぴりりッ、と特有の音がした。三〇デニールのパンストが、無残にも破かれたのだ。

「レイプしてるみてえで興奮するぜ、イヒ」

穿けなくなってしまうのはいただけないが、彼が昂ぶることに比べれば些事だ。何より彼女の頭の中は、今や女陰に肉棒を挿入する営みのことといっぱいだ。勿体ないなどとは、考えもしない。挿入をねだるように、その腰は左右にくねって居る。

「まあそう焦るなよエロ女が」

「あッ——」

彼女が穿いていたのは大胆なデザインのもの、黒のレースショーツだ。クロツチのあたりに、既に濃い染みが浮かんでいる。ホフゴブリンはそれを、数センチほど横にでずらす。それだけで、小悪魔の守られるべき園が曝け出される。

そこは花びらを開かせ、白濁した欲情の蜜をはしたなくも滴らせている。ひく、ひくつと卑猥に収縮して、疼きを端的に示していた。よく整えられた陰毛も淫蜜にまみれ、雌臭をぶんぶんとふりまいていた。

「チンポしゃぶりでマンコぐちゃぐちゃにしやがつてよお、スキモノ女が。俺のチンポがそんなに美味かったか、え？」

「んはッ……あッ、は、あはあッ、んくううッ」

彼は当然の権利だというように、指を体内に忍び込ませてくる。ウインナーじみた太い

指で、膺襲をじつくりとこねてくる。さして激しくもない、ほんの挨拶程度の愛撫だが、小悪魔は蕩けた声をあげて膝をカクつかせる。それだけ、ひどく欲情していたのだ。

「ハッ、あ、はあッ、あんな、はあ、ああ、んう」

甘い声が、喉の奥から漏れる。書架に預けた上体を、むずがるように揺する。ぽたつ、ぽたつと、秘貝から滴った淫汁が、絨毯に濃い染みをつくっていく。

「オイ汚してんじゃねえよ、掃除が大変だろが」

「んうッ！」

形良いヒップを軽く叩かれるが、それにすら甘い声をあげる。

「司書が床汚してちゃ世話ねえだろ。つたく、マジでしょうがねえ。俺が拭いてやるよ」  
「え——はあッ！ アッ、あ、く、はあああッ……！」

秘部に、ナメクジが這い回るようなヌルヌルとした感触を覚えた。舌で舐められている。くちや、くちやつと音を立てて、恥部を、陰核を弄ばれている。生理的嫌悪感と表裏一体の性感に、ぞくぞくと背筋が震える。羞恥とないませの妖しい性感に腰が揺れ、切なげな声が漏れていく。

「おいおい、舐めても舐めても止まんねえぞコレ。だらしなすぎんだろ雌犬が。身体中の水分全部マン汁として垂れ流すつもりか？ 大変ですね」

「すみません、はしたない穴なもので……よければ、床を汚さなくて済むように、蓋してくださいませんか？」

色狂いの表情を浮かべ、小悪魔は尻をくねらせる。あまつさえ、はしたない穴と称した己の秘貝に指を伸ばし、左右から割り開いて、サーモンピンクの粘膜を見せつけます。寧丸に溜め込んだ汁を吐き出すことしか考えていないホフゴブリンを誘うのに、これ以上の手はなかった。

「当たり前だろ？ 俺と小悪魔ちゃんの仲じゃねえか。それにこっちも、そろそろハメてやろうかと思ってたところだ」

「ああん……」

効果はてきめんで、彼のモノは最初と比べてすらいっそう甚だしく勃起していた。尻肉に、ぺちぺちとペニスを押し当てられる。思わず、溜息が漏れる。彼らのモノは、他の種では味わえないほど熱い。これが本物の雄なのだ、熱量だけで伝えてくるかのようだ。期待に胸を高鳴らせる小悪魔だったが、かろうじて最後の理性が働いた。

「あの、ゴムを」

「あん？ おっとそうだな、悪イ悪イ」

精を得ることは死活問題だが、かといって図書館の仕事を疎かにもできない。避妊せず

交わってうっかり孕みでもすれば、本業に支障が出てしまう。それは避けるべき事態だ。だから、彼らと交わるときでも、避妊だけは忘れなかった。

一瞬興を削がれたような表情を浮かべたホフゴブリンだが、気を悪くした様子はない。もつとも、悪びれてもいなかった。無責任が彼らの特徴だ。今だって、言われなければ、生での挿入に至っていたのは間違いない。

ポケットからゴムを取り出す。ペニスが気持ちよければいい彼らに、コンドームを用意する習慣などない。そのわりにいつ求められるかも分からないので、小悪魔のほうで常備するようにしていた。彼らのモノにあわせた特大サイズの避妊具を、慣れた手つきで取り付ける。薄緑の膜に覆われたペニスは、相変わらず立派だった。

「よし、これで万事オツケーだな？ んじゃそろそろ、お楽しみといくかア」

膣口に、肉竿が押し当てられる。たとえゴム越しであっても、肉棒の存在感というのは圧倒的だ。キュンッ、と、自らの膣肉が収縮するのが分かった。いよいよセックスをするのだと感じた子宮が、期待に疼いているのだ。

「そらッ！」

「あッ、はあああああッ……！」

腰が押し出され、欲望の権化が女の聖域に入り込む。グプン、と、沼に杭を打つような



音が響く。一瞬遅れて、肉と肉のぶつかる乾いた音が鳴った。

剛棒は膺襲をかき分けて、小悪魔の体内を蹂躪する。先端がコツンと、奥の奥を突いた。その瞬間走った電撃的性感は、決して他の手段では味わえないものだ。骨の髄から震えるような悦びに、蕩けた法悦の声があがる。

「おおおッ、相変わらずとんでもねえマンコしてやがる。氣イ抜いたら出ちまいそうだ」  
すぐに腰を打ち付けてくる。挿入の余韻を楽しむような情緒が彼らに備わっているはずもないが、それにまして彼女の膺が卑猥であった。とんでもねえという表現は、ある意味核心を突いたものだったのだ。

「はあんッ！ はあッ、あはあッ、あんッ、はあ、ああんッ」

ぱしんッぱしんッと響く小気味よい音とともに、脳味噌の後ろをノックするような快感が断続的に襲いかかる。そのたび、蕩けたような官能の声があがる。もっとハメてほしいといわんばかりの淫声にホフゴブリンは大いにあてられたらしい。さらなる快楽を引きだそうとするかのように腰を繰り返してやる。

「あはあッ、ああッ、はんッ、ああ、そこッ、あはあッ、そこいいッ」

泥沼のように濡れそぼった肉貝は、グロテスクな棒をねじ込まれるたびに、ぶぢゅッ、ぬぢゅッと、粘っこい音をたてる。突き込まれるたび、熱い淫蜜がぴっ、ぴっと飛び散り、

彼の下腹や床を濡らしていく。

「おおッ、なんつうッ、うおお、すっげ、うおおッ」

知らず知らずのうちに、小悪魔も腰をくねらせていた。破れたパンストに覆われた白いヒップが艶めかしく踊る様は、さながらサバトのごとしだった。

ホフゴブリンが低く呻く。雑種とはいえ淫魔の血を引く小悪魔の腰使いは、性欲の権化のような彼らをして、魅了するに足るものだった。ましてその膣が、男根を奥へ奥へ誘うように蠕動し、ふわりと柔らかく包み込んで締め付けるとなればなおさらだ。

「おおッ、やべえ、おおッ、この俺が、おおッ、俺のチンポがッ、持って行かれるッ」

「はあッ、あはッ、ほらッ、あはあ、もつと頑張つてっ、あああんっ」

ホフゴブリンの腰使いが際限なく速くなっていく。あわせて、小悪魔の腰も大きな円を描くような、なんとも猥褻な動きにシフトしていく。

彼の限界が近いことを、小悪魔は察していた。膣内で肉棒が膨れ上がりつつある。ゴム越しでも分かるほどの熱量もいっそう増し、体の中から蕩けてしまいそうだった。それらが射精の兆候であると、知らない彼女ではなかった。

「あああああッ、出る出る出る、オアアアアアアッ！」

爪先をぴんと立たせ、腰を前方に突き出すようにして、ホフゴブリンが叫ぶ。肉感的な

尻と彼の下腹が、ぴったりと密着する。女穴ヴァギナの奥深く、子宮口を亀頭が小突くと同時に、陰茎は限界に至る。

どくん、どくんと、肉棒が逞しく脈動する。彼女を孕ませるべく勢いよく解き放たれた白濁は、しかしゴムによつて阻まれる。

「は、ん、はあッ、あッはあああッ……！」

一番深くを小突かれたのと同時に、彼女もまたオーガズムにいたった。喉の奥から法悦の声をあげて、全身を駆け巡る悦びに体を震わせる。肉竿が膣内で暴れるたびに、魔力が満ちていくのが分かる。

このエクスタシーは、他のどのような娯楽でも味わえない。ペニスが脈動するたびに、彼女は全身をふるりと震わせて、女として生まれたからこそ得られる悦楽に揺蕩った。

「はッ、あはあッ、あはあん、ああ……」

「おおッ、ほお、おお——はア……いやあ、とんでもなく出たぜ、まったくよ」

やがてホフゴブリンは射精を終え、長い溜息をついてから腰を引き抜く。ぢゅぽッ、と、膣口が生々しい音をたてた。

小悪魔は書架にもたれかかり、肩を上下させている。身体は汗でじつとりと湿っており、雌汁の香りと相まって卑猥なフェロモンを漂わせている。カクつく脚が、たった今の性交

で彼女が得た快樂を物語っていた。

「へへへ、小悪魔ちゃんの具合が良すぎてすつげえ量出たわ。ホレ見てみるよコレ」

言つて彼は、たつた役目を終えたばかりのゴムを外し、小悪魔の目の前に突き出した。ホフゴブリンというのは大変に繁殖能力が高い。精子の製造量も相当なもので、使用済みのゴムには水風船と見まごうほどの汚濁がたつぷり詰め込まれていた。

「あはッ……素敵ですねえ……」

普通ならば汚物だが、性の快感に蕩けた小悪魔は、目を輝かせてそれを受け取る。雄の精を啜る者たる彼女からすれば、ごちそう以外の何物でもなかった。

「えあ」

見せつけるように大きく口を開く。舌を突き出し、たつぷり溜まった精液を、ゴムから絞り出すように舐め取つていく。とれたて精液は濃厚で、鼻が馬鹿になつてしまふようなほどの臭気を放っている。コンドーム特有のゴムくさがさが若干映つてしまつてはいるが、それすらオツなものに思えた。

「はむう、ちゆるッ、えあ、んふう」

「つひよお、たまんねえな、こりゃ」

ぷるりとした瑞々しい唇、薄紅い舌が、白濁を浴びてピンクに染まつていく。うっとり

とする彼女は、知らず知らずの内に腹の奥を疼かせていた。空いた片手が、無意識のうちに淫貝をこねている。淫穴は先ほど達したばかりだというのに、ヒクツ、ヒクツと蠢いて、さらなる性交を求めているかのようだ。

「ホレ小悪魔ちゃんよ、ちよつと見てみるよコレ」

さらなる性交を求めているのは、彼女ばかりではない。ホフゴブリンもだ。その証拠に、彼が自ら指さした魔羅は、凶悪にそそり勃っていた。既に二度射精しているというのに、萎える気配をまるで見せない。むしろ、女を貫く瞬間を今か今かと待っているかのようだ。血を求めぎらつく妖刀のごとしだった

「あ——えっ？」

膝からかくんと力が抜けて、立ち上がれない。己の体に起きた異常に、気の抜けた声がある。

何が起きたかを、小悪魔はすぐ理解した。つまり、妖刀に魅入られたのだ。あれほどのセックスをしてなおまだ威容を放つ剛棒、女を虜にする魔の剣に、彼女のように発情した雌が抵抗できるはずもなかった

仮にも淫魔の血を引いているはずの己が、たった一目で、敵わないと思わされた。それほどまでに立派で、おそろしいほどに禍々しかった。ここまでの行為で発情しきっている

など、色々な要因はあっただろう。だが今は、そんなことはどうでもいい。重要なのは、彼女の瞳に、もはやペニスしか映っていないということだ。

「あ、は、あ、あ——」

いつの間にか、仰向けになり、大きく脚を広げていた。服従の姿勢であり、交尾を望む姿勢だ。貫かれ支配されることを、自ら望んでいるのだ。

「お？　なんだ？　チンポ見て発情し始めやがった。とんでもねえ雌犬だな」

ホフゴブリンがニヤニヤと笑う。瞳には、はつきりと嘲りの色がある。下衆中の下衆に見下されているわけだが、その屈辱すらどうでもよかった。今はとにかく、ペニスのことしか頭にはない。

「へへへ、なんだよ、さっきのじゃ足りなかったってか？　そんなにハメてほしいのかよ、え？　なら望み通りにしてやるよ、逃げられねえぞオイ」

「あぁッ」

覆い被ざられ、両手を押さえられる。別にこの程度の拘束を抜けるくらいはわけもないが、最早このペニスの餌食になるしかないのだと思い知らされる。

「さっきゴムしろとか言ってきたのはどちら様だったかなア？　お前から誘ってきたんだ、もちろんナマでやらせてもらうけど、いいよなア？」

「アツ、は、もちろんです、ナマで、ナマチンポでハメてください……!!」

膣口に亀頭が押し当てられる。宣言通り、彼は避妊しようとしなかった。実のところ、ポケットにまだストックは残っている。けれども彼女は、生挿入を求めた。拒むことなど、できるはずもない。子宮に精を受けたい、いや受けさせていたきたいと、本能が望んでいたのだから。

「よし、一、二の、三で挿入れるぞオ。三でチンポが入るんだから、気合い入れろよオ」  
「アツ、は、んツ、んうう」

先の射精でスペルママみれの亀頭で、ぬちツ、ぬちツと膣口を擦られる。コンドームという無粋な壁なしの、本物のペニス。被せ物なしの生ペニスは、素股とも呼べない愛撫ですら下半身を蕩かしてしまいそうなほど、甘美な存在に思えた。

「よし行くぞ、一二ツ!!」  
「あ、ツ、はおおおおおおッ!」

約束を守るような律儀さが、彼にあるはずもなかった。不意打ちのように腰を突き出してくる。下衆な雄の肉塊が、小悪魔の体内に侵入する。傘のように張り出したエラが襲を思い切りめくり返し、とろとろに解れた敏感穴を太い竿が容赦なく押し広げる。

「はひいいッ! あツ、く、くはああああッ」

かぶり物のない本物の魔羅の存在感たるや、性の熟練者であるはずの小悪魔すら乱れに乱れさせて余りあるものだ。彼女は背を反らしてのけぞり、がくがくと全身を震わせる。喉の奥から、ここが図書館であることを忘れたかのような嬌声が響く。挿入されただけで達してしまっただの。

「うおおッ、すげえ！ 生マンコすっげえ締まんじゃねえかお前！ これまで手エ抜いてやがったのか、ええ!？」

もちろん、相手が絶頂しているからといって待ってやる気遣いなど、ホフゴブリンには無い。むしろ叩き込むような勢いで、激しく腰を前後させていく。

「はひッ、あおッ、くひいッ、はあッ、おッ、おおんッ、はああッ！」

ばんッ、ばんッと、下腹と下腹とがぶつかり合い、ペニスがヴァギナを蹂躪していく。

先ほどの立ちバックでのセックスとは異なったところを亀頭が小突き、肉幹が擦り上げる。ぬぶぐちゅずぼと膣口が音を立て、ごりゅごりゅと体内が押し広げられるたび、脳味噌がはじけ飛びそうな快感が全身を駆け巡る。もはや小悪魔にできることといえは、その美貌をぐしゃぐしゃにし、涎を垂らしてよがるくらいだ。あがるのは、獣じみたよがり声だった。「生チンポ突っ込んでようやく本性あらわしやがってよお、なアーに貴方たちと違って真面目ですからだアおい！ チンポ狂いの雌犬が、お高くとまってんじゃねえぞ！」



「あぁッ！ ひいッ、はひッ、あぁッ、んはぁぁッ！」

わめきたてながら、ホフゴプリンは彼女のブラウスに手を伸ばす。ボタンを引きちぎるように前を開かせ、黒のブラを下へずらす。ぷるんッ！ と跳ねるようにまろび出た二つの果実は、たわわでありながら形のよい、誰もが羨むようなものだ。それをホフゴプリンは、我が物顔で揉みしだき、先端を摘まんで、彼女からさらなる快樂を引き出す。抗えるはずもなく、ただただみっともなくよがるばかりだった。

「おらおら、どうしたよ、え？ もつと腰振ってマンコ締めろや、役目だろ！」

「ごすごすと、膣奥を乱暴に突き上げられながら思い知る。快樂を与え精をもらう関係だなどと、思い上がりも甚だしい。快樂を与えていただき精を注いでいただく、の間違いだ。女である以上、ペニスには勝てないのだから。」

「おい何逃げようとしてんだ、そういう悪いやつには、お仕置きしてやらねえとなあ！」  
「んあぁぁッ、ひいッ、はひいッ、あひッ、あおッ、くはぁぁぁッ……！」

快樂地獄から逃れようと身をよじる。もちろんん見とがめられた。罰だと言わんばかりに、くびれた腰をしつかり掴まれ、下から突き上げるようにほじくり回される。かと思えば、上からのしかかるようなストロークに、子宮ごと押し潰される。乱暴でありながらも多種多彩な腰使いに、もはや彼女は夢中になっていた。この行為が終わっても、もはや彼らの

ペニスのことしか考えられなくなると断言できるほどに。

「あああ縮まる縮まるッ、そろそろ出すぞ、どこに出してほしいんだよオイ。そういえば孕んだらマズインだっけなあお前、じゃあ外にしてやろうかア!」

「そういえばそんなことを言ったような気もする。今にして思えば、なんて愚かだったのだろうか。生のペニスで蹂躪され、最後には子種を植え付けていただく。その素晴らしさに比べたら、他のことなどなんでもないだろうに。」

「ダメッ、だめ、中に出してくださいッ、子宮にびゆるびゆる出して、濃厚ザーメン子宮にブチまけてイかせてくださいいいッ!」

「はっはア上等だオラッ、言ったからには責任取れよッ、オラッ、思い知れッ……!」

「ひいッ、ひいッ、ひいッ、はひ、あああ!」  
「ばすんばすんと、もはや突き殺すかのような勢いで腰が繰り出される。結合部が摩擦ですり切れてしまいそうな勢いだ。そのトルクが最高潮に達した瞬間、彼は一番深くに槍を突き込んだ。」

「——あッ」

「むちゅう、と音がした。鈴口と子宮口が密着し、熱烈なキスをしたのだ。」

「食らえや、雌犬が」

「ッ——ひ、ッ、あ、あああああああああああああッ！」

と同時に、濃厚な精が放たれた。ぎとぎとしたスペルマが、子宮を埋め尽くしていく。まさに、精力絶倫たる彼らだからこそできる芸当だった。

今まで彼らの精を、子宮で受け止めたことはなかった。こんなものを注がれたら最後、一発で孕むのが明らかだったからだ。はつきりと後悔した。恐ろしいほどに濃厚な精を、余すことなく腹の奥に注がれる恍惚は、何によつても得られないものだったからだ。己の子宮を捧げてもよいと思えるくらいには。

それだけに、今までのことが悔やまれる。せつかくセックスしてもらつておいて、肝心かなめの腔内射精を逃していた。愚か、愚か、愚か、もうひとつおまけに愚かだ。自分が馬鹿に思えてしよがなかつた。

けれども、いいのだ。なんといいの彼らは、これからも自分を求めるのだろうか。そのたびに生セックスができて、この快樂を味わえるのだ。まさに理想の生活である。

「はひあッ、あはあああああああッ！」

それほどの恍惚に放り込まれたのだから、当然、絶頂せずにはいらられるはずもなかつた。ブリッジするように体がそる。剥き出しの乳房はふるんと震え、全身はがくがくと、何かの病の発作のごとく痙攣する。結合部からは潮が噴き出し、脚はぴんと張り詰めている。

意識が飛ぶほどの性感のなかで、彼らに対する自らの決定的な屈服を、彼女は感じていた。「おおおッ、おおおッ、おおおおおッ、出した、出した、今度こそ赤玉だア……」

強烈な快楽の波は、次第に引いていく。火山の噴火のようだったペニスの脈動も段々と収まって、彼は腰を引く。亀頭が抜ける瞬間、ぶぽッ、と、快楽の余韻に収縮しっぱなしの膣口が間抜けな音をたてた。ひくッ、ひくッと痙攣を繰り返しながら、収まりきらない子種をてろてろと零している。

「はひッ、ひい、ひいッ、はへッ、ひいッ……」

精魂使い果たした小悪魔は、夏場に道ばたで潰れている蛙のような醜態をさらしていた。みつともないといえbaumみつともないが、あれほどの快楽を受けたことを考えれば、同情の余地はあった。

「へっ、小悪魔ちゃんよ、俺のチンポは気に入ったか？ え？」

「はひ、はひい……ありがとうございましたあ、もうホフゴブリンチンポなしじゃいられないのお……ッ」

もはや指一本動かす体力も残っていないが、首を縦に振る。感謝の言葉もつけた。意思を言葉や態度で表すことは大事だ。

「へへへ。これで小悪魔ちゃんは俺らのチンポに夢中ってわけだ。まずは一号だな」

「……一号？」

「おう。もうお前は俺らに、つうか俺らのチンポに逆らえねえだろうし教えてやる。実はこの屋敷の女ども全員に、俺らホフゴブリンのチンポのよさつてもんを教えてやろうって計画があがつてんだよ。今だからゲロるけど、その一号が小悪魔ちゃんだな」

女の立場からすれば、決して、受け入れられるべきでない計画だろう。だが彼女は、むしろ巻き込んでくれたことに感謝を覚えた。それが、墮とされたということの何よりの証拠だ。「まあ小悪魔ちゃんは思ったより楽で助かったよ。もともとスケベ女だったのが良かったんだろうな。だが、この次がな。なんつってもあの魔女サマだ。飯より睡眠よりセックスより本、本、本って感じだし、墮とせるかつつうと正直キツそうだろう？　そこでお前だよ、小悪魔ちゃんよ。なに、ちよつと手伝ってくれるだけでいいんだ。お前が奴隷一号として手伝ってくれりゃあ、随分楽になるはずなんだよな」

気軽な提案のようだが、彼らが企てているのはつまり紅魔館に対する反乱だ。手伝えというのは、裏切れというのと同義だった。しかも自ら奴隷の立場を受け入れるとまでいう。そんな馬鹿な話はない。

彼らの提案は、当然受け入れられるべきでないものだ。今の小悪魔ですらそう思えた。だが、拒む気持ちは、次の一言で消える。

「悪い話じゃねえ、奴隷になりや、毎日俺らのチンポでハメ放題だぜ？　なんつったって、ソレが仕事になるわけだからなあ」

「あはッ……」

ホフゴブリンの目には、明らかな悪意が浮かんでいる。けれども、どうでもよくなった。毎日ハメ放題。とてつもなく魅力的な選択肢だ。他が選べなくなるほど。なんといつても、あんなに素晴らしいペニスに、逆らえるはずもないのだから。

「ええ、ええ……私でよければ、是非手伝わせてください。私小悪魔は、ただ今をもってパチュリー様との契約を破棄し、ホフゴブリン様のおチンポ奴隷になります。どうか私のお口を、おマンコを、おチンポ抜き穴として使ってください」

あつさりと主を——元・主を裏切り、自らの全てを売り払う。かまいはしない。払ったものに相應しいだけの、むしろ不相応でないかと思うくらい素晴らしいものを、得られるのだから。すなわち、これから待ち受ける、あの燃え尽きるようなセックス漬けの生活を。「ヘッ、雌犬が、ああいや、受け入れてくれるとくれると思っただぜ小悪魔ちゃん。いや、もうそんな呼び方しなくていいか……じゃあマンコ一号よお、早速仕事だぜ。おいお前ら、出てきて良いぞ」

「へへ、待ちくたびれたぜ」

「隠れて見てたからよお、もうチンポギンギンだわ。責任取れや」

「さしあたり、俺ア口でも使わせてもらうかね」

「あはッ……」

彼が周囲に声をかけると、書架の陰からホフゴブリンがわらわらと湧いてくる。小悪魔はあつという間に取り囲まれた。

誰も彼も勃起した陰茎を露出し、欲望のこもったギラついた目でこちらを見つめている。「おう、あんな前口上述べてくれたんだ、奴隷の仕事は分かっただら。早速働けや」

「あ、はッ、もちろんですッ、あはあ」

じりじりと詰め寄られながら、小悪魔は今後のことを考える。自らの素晴らしい生活のことではない。その前提となる、ホフゴブリン達のクーデター成功についてだ。

暴力では勝てない。レミアア・スカーレットをはじめとして、館の住人は強者揃いだ。雑兵である自分が裏切ったところで、ミリ単位だつて揺るぎはしないだろう。

もっとも、そんなのは分かりきっている。腕力でダメなら、他の手段で勝てばいいだけのこと。つまり、ペニスで。幸い、この館の住人は全員女だ。女相手なら、ベッドの勝負に持ち込みさえすれば、ホフゴブリンの勝ちは見えている。

彼女らにも悪い話ではない。なにせ、こんなにも素晴らしい快樂を味わえるのだ。最初

のうちこそショックかもしれないが、すぐに理解するだろう。自分が墮とされたように。「あはあッ、あんッ！ あはあッ、ぢゆるッ、んふうッ、んうう！ んッ、ぢゆる、ずぞ、んふうううッ……！」

今日から紅魔館は、ホフゴプリンたちが治める、肉棒と膣の楽園に生まれ変わる。

そんな期待に胸を高鳴らせながら、彼女は腰を振りたくり、目の前のペニスにしゃぶりついた。